

### 第8.5節 切腹から赤穂城明け渡しまで

(2021年09月 第44号)

忠臣蔵の連載を始めたところ、嬉しいことに読者からの質問が届きました。今回はこれまでに読者から頂いた疑問にお答えし、内匠頭切腹以降についてお話しします。

#### 8.5.1 読者からの素朴な疑問に答える

##### 1) 質問

- A. 吉良邸討ち入り時の、江戸市内はどんな警備状況だったのでしょうか。
- B. 江戸市中の夜間警備は各町の責任になるので、各町に自身番が警備等の仕事をします。時間の告知、火災予防、不審者への警戒等はどうなっていたのですか。
- C. 夜間は木戸を出して、出入りが出来ない様にしていたと聞きました。この木戸は町毎に設置するので、町内は木戸だらけになります。この中を47人の武装集団が、木戸が無いかの如く容易に本所の吉良邸に辿り着けるのでしょうか。
- D. 翌朝未明に、吉良上野介の首を槍の先に掲げて、高輪の泉岳寺まで行進出来るのでしょうか。
- E. 木戸番や自身番が木戸を開放する権利はないので、権利が有る町奉行、老中等の決断が必要ではないのでしょうか。
- F. 城内に住んでいた吉良を城外に出したのは、仇討ちのチャンスを与える柳沢吉保の意図的工作と思います。

##### 2) 筆者からの回答

- A. 江戸の町の「木戸」は表通りに対して、例として間口8間×奥行15間の敷地の中央に1間ほどの通路が有り、表通りには「表店」があり、敷地の中央に1間巾の通路を挟んで、裏長屋が左右に有り、井戸、トイレも共同です。この裏長屋の入口に「木戸」が有るのが標準的な例です。この標準長屋が多く集合して町が形成され、町の「木戸・木戸番屋」が有ったのです。冬季と夏季では、町の木戸の開閉時刻が違う「不定時法」ですが、討ち入りは冬ですが、木戸を開ける時間は明け六つ(午前6時頃)、閉めるのは夜四つ(午後10時頃)と考えます。
- B. 討ち入り前の集合場所は、豎川沿いの下級武士や庶民が川沿いに住んで居るエリアであり、川沿いの道には「木戸」や「木戸番屋」は無かったと思います。江戸時代の古地図でも記述がありません。吉良邸に一番近い集合場所は前原伊助邸、吉良邸まで約1.1kmの堀部安兵衛邸と杉野捨平次邸の2ヶ所も下級武士や庶民達の家、もちろん商店も有ったと思いますが、川沿いで木戸の制約は受けにくいと考えます。木戸の閉まる夜10時前に集合場所には行けます。
- C. 「木戸・木戸番屋」も墨田川を挟むと江戸城から遠くなるので、管理上、多少甘いのではないかと考えられます。その理由の一つが、吉良の屋敷替えは江戸城より遠い松坂町で、討ち入りを予想して江戸城より離れたと考えます。
- D. 引き上げには「両国橋」を渡りませんでした。討ち入り時間の説は多々ありますが、
  - ①先ほど記した集合場所を出発したのが寅の上刻(午前3時頃)吉良邸が深い眠りに入っている頃。
  - ②吉良邸到着午3時15分頃(遠い距離で約1,100m)、この間豎川沿いを行き「木戸」は関係なしで行けたと私は考えます。

③即討ち入り開始後、終了午前5前頃（卯の上刻前）約2時間弱。

④吉良邸出発 午前5時頃（卯の上刻頃）、鎖帷子着装して、刀・ヤリ等持って、途中休憩もして、泉岳寺まで約12kmを時速4km前後で泉岳寺に向かう。

⑤泉岳寺着午前8時頃（辰の正刻頃）

E. 前書きが長くなりましたが ④5時頃両国橋を渡ると「木戸や木戸番屋」が開いてない事も有る、④吉良の長男が婿入りしている「上杉藩の追っ手」と出くわすかもしれない、又⑤「下級武士」達の登城時間帯となり、出くわすかもしれない、（午前8時に江戸城の見附門が開く）

等の理由で、墨田川沿いの木戸も心配無い道を選び、永代橋で渡れば「木戸」も開くしトラブルを避けたのではないかと思います。

⑤それとトラブルに巻き込まれない早い内に、永代橋に近い浅野家の江戸屋敷のそばを通り、浅野内匠頭はいないが、討ち入りの報告を心でしたと、私は考えます。

F. 当然映画等でも竹に書面を挟んで、掲げています。大石はこの「討ち入りの理由書」を持って討ち入りをしています。途中二人が離れて、幕府に討ち入りを報告に行っています。当然書状を持参していると思います。口頭だけの報告ではないはずです。

この先は、海沿いの東海道を品川の泉岳寺に向かったと思います。いずれにしてもアップダウンの比較的無い道乗りで、早く主君に報告をと行軍したと想像します。

### 3) 江戸の木戸についての補足説明

①「江戸における木戸・番屋の成立と機能」（波多野 純氏）の論文（国立歴史民俗博物館研究報告第60集（1995年））を見ると、

- ・ 神田連雀町の木戸は、皮付きの丸太を柱として両側に立て、頂部を同じく丸太の貫でつないだだけの簡単な仕様です。
- ・ 河岸地の木戸は、製材された材木を用い、建具が有ります。
- ・ なぜこの様に場所により異なるのは、設置者の経済力の差が有る様です。河岸地に関わる者は、経済的に豊かなことが影響している様です。
- ・ 山王祭のルートから外れる脇道では、矢板を仮設的に木戸代わりにしています。

②狭い路地では移動式の柵を木戸代わりにしている場所があり、映画に出る様な立派な木戸が有るのは、大通りや経済基盤が豊かな地域と思います。

③木戸は、「江戸の安全を確保するために、柱の間に両開きの扉、道路際までの柵や板塀で各町内の入口と出口設置。夜四つ時(午後10時)から朝六つ時(午前6時)までの夜間は閉じられ、木戸番の監視のもとに、脇の小木戸(またはくぐり戸)からのみしか通行出来なかった。」大型の移動式の柵の様なもの・現代のバリケードの様なものもあったそうです。

④「古地図で楽しむ江戸・東京講座」（株ユーキャン）の冊子で「町の内部（町人地）」、「江戸の町の自治」を見ると、庶民の住環境の長屋構成は表通りに面した表店に挟まれて、表通り寄り少し引込んで1間ほどの狭い路地に木戸が有る図表示があります。この木戸の開閉管理は、その長屋の住民が、長屋の木戸の開閉管理をしていた様です。

⑤いくつかの長屋をまとめて町内として地主や家主（大家）が詰めていた「自身番屋」が有り、町内の警備や事務処理をしていました。現在の集会所の様なところで、消火用の道具や捕り物道具も供えられていたのです。

⑥町の出入り口には木戸があり、夜間は閉じられました。「木戸の開閉をする番人は町で雇用したが、その収入が低く、番屋で日用雑貨を販売しながら副収入にする事が許されていた。」と記されています。

### 8.5.2 浅野家の動き

浅野内匠頭は現在の東京都港区にある泉岳寺（曹洞宗）に埋葬されました。

1701年（元禄14年）3月14日（旧暦）、松の大廊下の刃傷事件発生後、赤穂に早駕籠が二度に渡り向かいました。第一の早駕籠は刃傷沙汰のみの伝達で、14日の午後3時半、第二の早駕籠は浅野内匠頭の切腹、赤穂藩の取り潰しの件を伝達するため、14日の夜にそれぞれ出発しました。通常では1週間程度かかるころ、昼夜連続で駆けつけて4日半程度で赤穂に到着したのです。

藩士総登城で大石を上座に据え、連日対応の議論が行われました。浅野親族の大家からは穏便に急ぎ開城をとの使者が送られてくるし、藩士達は吉良が処罰なしなので、抗議の為に籠城をする考えの者が多かったと言われています。家老の大石は、内匠頭の弟浅野大学を立てて藩の再興を考えると、籠城は不利になるし、大学に迷惑をかけてしまうと考え、藩内での議論と同時に吉良の処分の嘆願書も幕府に出していました。

議論の結果を大石が出したのは、赤穂城の前で皆が切腹することでした。切腹の時、自身の思いを述べれば幕府も吉良への処罰を考えてくれるのではないかと考えたと言われています。しかし、大石は、その後切腹を口にしなくなりました。切腹という方針を出したことで、本当に味方する藩士を見極めようとしたのではないかとされています。

最終的に切腹の結論が出ると、切腹に同意する「起請文」（神文—しんもん）（神仏に呼びかけて、もし自己の言が偽りならば、神仏の罰を受けることを誓約する文書）を60余人が提出しました。議論がすぐ収束しなかったのは、次席家老の大野九郎兵衛等による反対意見もあり、大野は主君の弟の浅野大学が大事で、穏便に赤穂城を幕府に明け渡すのが大切と考えていたからでした。

切腹の「起請文」（神文）を出すことになり原惣右衛門が、「同心されない方は、この座を立っていただきたい」と発言すると、大野をはじめとする10名が退出しました。原惣右衛門はもしこの時、大野が退出しなかった時には、大野次席家老を討ち果たしているところであったと、後に回想していたそうです。また、この時に江戸から来て参加した片岡源五右衛門、磯貝十郎左衛門、田中貞四郎の3人は切腹をしないで、吉良を討つとの旨を述べて退出したそうです。

大石は1701年（元禄14年）4月12日（旧暦）に赤穂城の明け渡しを決意し、4月18日（旧暦）に明け渡されました。浅野内匠頭切腹から、約1か月後のことでした。しかし、大石は城明け渡しの際にも、浅野大学によるお家再興を上使（じょうし—江戸幕府から諸大名などに將軍の意（上意）を伝えるために派遣した使者）に嘆願し、江戸に帰り次第、その旨を老中に伝えるとの上司から返答をもらいました。

そして取り潰しによって家臣達や商人達が路頭に迷わない様に、赤穂に残った財産を家臣達の退職金と商人達の半札への支払いに分配する作業に入りました。江戸高輪の泉岳寺では、1701年（元禄14年）4月12日から3日間、浅野内匠頭の法要が行われました。幕府からの許可が下りたためでした。

## 第8章 忠臣蔵と川崎市の縁（ゆかり）

領内に発行していた藩札は、現在の金額で約 18 億円と、赤穂藩の年間予算に匹敵した額の様です。大石は藩札額の 6 割を返還することで解決しました。更に、300 名の藩士には退職金総額 23 億 1500 万円（平均 780 万円/人）、足軽は約 800 名です。藩士からもらうのでしょうか。残った 691 両（約 8200 万円）を、大石はどの様に使用するかを考えていました。後ほど、解答が出てきます。

### 人生を豊かに（雑学のすすめ）

- ・甘酒とは、日本に昔から伝わる甘い飲み物のひとつで、米麴と米、または酒粕を原料に作られます。はじめに知っておきたいことは、この 2 つの甘酒は、作り方も、栄養価も、全く違うということです。
- ・酒粕で作る甘酒は、酒粕を水で溶いて煮詰めて作ります。一方、米麴で作る甘酒は、米麴に水を加え発酵させて作ります。
- ・酒粕は甘みが薄いのですが、米麴は発酵時にできるブドウ糖により甘くなるので、砂糖を添加しなくても、しっかりとした甘さを感じます。
- ・特筆すべきは、その美肌効果です。麴を発酵させた甘酒には、保湿効果の高いビタミン B 群が豊富に含まれているので、美肌の基本となる"うるおい"をサポートしてくれるのがうれしいですね。そのほか、肌への効果としては、甘酒にはコウジ酸が豊富に含まれていることから、美白効果も期待できます。そして、健康効果も抜群です。
- ・米麴の甘酒は発酵食品なので整腸作用があり、内臓が活性化し代謝アップに役立ちます。また、食物繊維やオリゴ糖も含まれているため、腸の働きを良くして便秘を改善する効果も見込めます。さらに、ダイエット効果が高いことも見逃せません。

### ご存じですか

少年院生活の 17 才の少年が書いた「なりたい」という詩から、外出自粛の時間の使い方を考えます。

心がこわれるほど 苦しくて やさしい言葉を掛けてくれる人 捜したけど どこにもいない ふと  
思う 捜すような人間やめてやさしい言葉を掛けられる そんな人間になりたい。（八街少年院刊  
『生活詩集 若い木の詩』より）

人生は思い通りになりません。今回の感染症問題もその一つ。外出自粛により私たちの生活環境は一変しました。しかし、その変化に心がついて行けません。その理由は、心が今までの生き方に引きずられているからです。詩の作者は 17 才の少年。制限された環境の中で自省し、人生を大転換させました。この詩に出会ったのは 24 年前、体は出家したものの、心が出家しきれず苦しんでいる時でした。詩を読んで大泣きしました。そして救われました。その時から「どんな自分になりたいの」が口癖になりました。生活環境の変化は苦しみを伴います。でも間違いなく人生の好機に出来ると、私は信じています。合掌 人気僧侶大谷徹瑛（てつじょう）から。

### 第8.6節 赤穂藩廃藩

(2021年10月 第45号)

廃藩とされた赤穂藩士は御家再興に望みをかけます

#### 1) 江戸諸藩士と国元藩士達との意見・意志調整

江戸詰めの家臣の堀部安兵衛をはじめとした高田軍兵衛、奥田孫太夫らは、吉良を打ち取る事に強く拘（こだわ）る強硬派（江戸急進派）で、吉良邸に討ち入る事を試みていたとのことですが、吉良の実の息子で出羽国（現在の山形県と秋田県）第4代藩主上杉綱憲（吉良上野介の長男・上杉家に養子入り）が吉良家を訪問する等警戒が厳しく、少人数では討ち入りが難しかった様でした。先程の三人は、以前国元に戻った時、籠城を強く進言した人達でしたが、大石は賛成しないで城を引き渡しました。

後に討ち入りを決定するまでは、大石達の上方の主流派（上方漸進派）の最大目標は、浅野内匠頭の弟の浅野大学を擁立し、浅野家再興にありました。これには訳があります。上方漸進派の代表の大石は代々浅野家に仕えており、浅野家とも親戚関係にあるので、浅野内匠頭個人に仕えるというより浅野家そのものに仕える意識が強く、お家再興に拘ったのです。

一方、江戸急進派の藩士達は堀部をはじめ、高田郡兵衛や奥田孫太夫等は、浅野内匠頭の代から浅野家に仕えた人が多く、このため浅野家よりも浅野内匠頭個人に対して仕えているとの意志が強く、内匠頭の宿敵である吉良を討つ事、そして武士の面子を立てることに拘っていたと考えられます。

**閑話休題** 「高田郡兵衛」は江戸時代前期の武士で、宝蔵院流高田派槍術開祖の高田吉次の孫と見られて槍の名手といわれていたようです。最初は三河吉田藩（現在の愛知県豊橋市）の小笠原長重（旗本であり後の三河吉田藩の第4代藩主、その後武蔵の国岩槻初代藩主）に仕えました。その後、浅野家の家臣となり、刃傷事件後は堀部らと江戸急進派の一人でしたが、この年の12月に突然脱盟しました。理由は旗本内田元知の養子となるか、断れば「討入り」を訴えと言われ、仕方なく「討ち入り計画」を口外しないとの条件で養子を受け入れたそうです。結果47士の中には入っていません。

#### 2) 大石山科に隠棲（いんせい）

大石内蔵助（1659年～1703年）は、1701年（元禄14年）6月（旧暦）、家族と山城国山科（京都）に隠棲しました。ここでも大石は幕府に対して、赤穂の遠林寺の僧祐海（\*2）を通じてお家再興の嘆願書を出しています。他の藩士達は、赤穂に近い大阪・伏見・京都等に住んでいた様です。

幕府の許可を得て赤穂にとどまった藩士も多かったが、百姓や町人として住むことになりました。一方、江戸詰め藩士はそのまま留まるものも多くいましたが、借家住まいとなりました。この頃までには、大石に起請文（きしょうもん）（人が契約を交わす際、それを破らないことを神仏に誓う文書）を出した同士は93人に増えていたそうです。

**閑話休題** 内蔵助の夫人阿久利（瑤泉院）が行った御家再興への取り組みや、吉良邸に討ち入りで吉良の首級を挙げた「義士」たちの助命を乞う試みについては佐々木裕（広島県三次市出身）の「義士切腹 忠臣蔵の姫 阿久利」（小学館）をお勧めします。

### 3) 当時の江戸の町民生活

江戸幕府の中間期に入った時代で、町民達の生活は徐々に安定してきた段階で発生した江戸城の中での刃傷沙汰事件でした。事件当日中に切腹までさせられた事は江戸での大事件であったと思います。

事件当初は浅野内匠頭の軽率な行動に非難の声が向けられた一方で、幕府による裁定の厳しさに対し、同情の声もあったのです。浅野が吉良に対して「遺恨（いこん）（うらみ）があり、それが「堪忍できぬもの」なら浅野の行動は「乱気」でも「不行跡」（ふぎょうせき）（品行の良くないこと）でもないはずと、浅野の行動に理解を示していることが「易水連快録」にあるとのこと。また、武士道の観点から言うと、売られた喧嘩を買わずに逃げるのは、武士にあるまじき不名誉な行為と、幕府に対する多くの批判もあった様です。

以上の様な世評があったので吉良は世間の目を意識して、高家肝煎（こうけきもいり）の辞職願を出さなければならなくなり、1701年（元禄14年）3月26日（旧暦）にお役御免となります。1701年（元禄14年）8月13日には屋敷替えを拝命し、東京呉服橋の屋敷を召上げられ江戸郊外の本所松坂町に移り住むことになったのです。

幕府も浅野家に対し一方的な断罪を下した事の反省なのか、世論の浅野家への同情の声が高まった事もあったのか実態は不明ですが、大名屋敷の多い呉服橋より、人気の少ない本所は仇討に適した場所であり、世評の「討入り」に幕府が選んだ場所であったかもしれません。

また、「江赤見聞記」（田中光郎著・赤穂城開城過程から討入り、切腹までを書いたもの）によると、呉服橋の吉良邸の隣の蜂須賀飛騨守は、赤穂浪士の討入りをすでに警戒をして、その為の出費が嵩むという理由で老中に屋敷替えを願い出ている事情が影響した可能性があると記しています。また、1701年（元禄14年）12月11日に、吉良上野介が幕府に出していた隠居願いの許可も下りました。

なお梶川も刃傷現場に居合わせ、浅野を取り押さえて諫めたことから、この行動が幕府に評されて500石加増になり、旗本になりました。しかし、浅野の不幸をもとに旗本になったので、世間の評判は悪化しました。この為、梶川は後に、浅野の無念を慮（おもんばか）るべきであったと後悔したことを、記しています。そして方々から睨まれては耐えられないと、子供に代を譲り自ら隠居したといっています。

### 人生を豊かに（雑学のすすめ）

#### 【新型コロナウイルスに有効な消毒・除菌方法】

新型コロナウイルスはエンベロープという脂質製の膜に覆われています。アルコールや界面活性剤でエンベロープを壊せば、感染力を失います。

手洗いの効果を見ると、手洗い（約100万個）⇒流水で15秒の手洗い（約1万個）（1/100なので99%除菌）⇒ハンドソープで10秒間もみ洗い後、流水で15秒すぎ（約100個）（1/10,000）⇒ハンドソープで10秒間もみ洗い後、流水で15秒すぎ（2回）（数個）（1/1,000,000）

（注意）手荒れを放置すると黄色ブドウ球菌が増えて、消毒剤が効きにくくなることがあります。

（森 功次他：感染症学雑誌、80：496-500より）

外国人が日本に学んだ10のことは第12章に掲載します

### 第8.7節 吉良邸討ち入りへの道

(2021年12月 第47号)

赤穂藩士たちそれぞれの立場での葛藤や苦悩には想像を絶するものがあった事でしょう。その中で御家再興の望みが立たれた事で事態は討ち入りへと進みます。

#### 1) 江戸急進派と赤穂・上方の斬新（ざんしん）派との江戸調整会議

吉良の屋敷替により堀部らの江戸急進派は、討入りの好条件と考え、大石に討入りを迫りました。大石は急進派を説得するため、9月の上旬に赤穂浪士の原惣右衛門、潮田又之丞、中村勘助の3人を、更に10月には浪士の進藤源四郎と大高源五を江戸に向かわせましたが、江戸の急進派に同調させられてしまいました。そのため大石は自ら11月2日、江戸に下り急進派を説得するため、会議（江戸会議）を行いました。しかし、上方から派遣した同志たちは、早期の討入り派の堀部達に同調してしまったこともあり、議論は堀部達の望む方向に一方的に進み、堀部達は討入りの日の期限を決断する様に大石に迫った様です。大石は浅野内匠頭の一周忌には結論を出したいと約束をしたのです。

12月11日に吉良上野介が提出した隠居の許可が下りたことで、江戸急進派の堀部達は焦り始めたのです。理由は幕府から吉良へのこれ以上の処罰は望まれず、更に吉良が米沢の江杉家に引取られたら討入りも不可能となるので、江戸の急進派は浅野内匠頭の一周忌までの討入りを主張しました。

一方、大石内蔵助は浅野内匠頭の弟、浅野大学によるお家再興を願う事にも影響すると懸念し、吉良上野介を討つ事が無理なら吉良の息子の吉良左兵衛義周を討てば良いとの考えもあり、大学の閉門が解ける3年をみて、主君の内匠頭三周忌まで討入りを待ってお家再興にならなかった時に、討入りを実行しても後悔をしないと考えていたのです。大石は浪士の調整が大変でした。

この様な中で、事件の翌年1702年（元禄15年）2月15日から京都の山科で、今後の進む方向を決める会議が数日間にわたり開かれました。「山科会議」です。この会議は直ぐの討入りの意見は少数で、しばらく様子見の結論になりました。

#### 2) 筆頭家老大石内蔵助の苦悩と行動

山科会議で討入りの延期が決まり、大石内蔵助はお家再興の嘆願書を再度出しました。大石の背後には再興を願う家臣達がいる、簡単に再興を諦めるわけには行かない事情もあったのです。また、この頃から大石の頭には討入りは不可避との覚悟もあったと思います。この行動に累が及ばない様に妻の「りく」を離縁し実家に返しました。この時大石は息子の主税に「寝ても覚めても吉良を打取る事を考えよ」と言った事が「江赤見聞記」に残されています。

実は大石は浅野大学を擁立した討入りを考えていたのです。浅野大学の閉門が解かれたら、直ぐに大学に討入りの許可を取った上で、吉良を討とうと考えていました。今までに何度も嘆願書を出し、討入りの時期を主君浅野内匠頭の三回忌まで待つ考えを持っていた事を、家臣達は読取る事が出来なかった様です。

#### 3) 江戸急進派、ますます大石を窮地に追い込む

しかし江戸の急進派は山科会議で討入り延期の話合いを行ったのに従いませんでした。原惣右衛門達が堀部らに、大石を見捨てて江戸急進派を中心として吉良を討つ提案をしたのです。しかしもし失敗したら2回目の討入りは無くなりますし、吉良「憎し」と思って討入りに参加しよう思っている残された藩士達の思いほどの様に考えていたのでしょうか。

堀部はこの進言に賛同し、上方に向かい賛同同志たちと計画を練り、1702年（元禄15年）7月24日

～25日に再び江戸に帰ろうと考えていました。

### 4) 浅野大学閉門と円山（まるやま）会議での重大決定

江戸急進派が討入りの打合せをしていたまさにその時、1702年（元禄15年）7月18日に大石の描いた浅野大学を擁立し、浅野家再興を願っていた夢が絶たれました。浅野大学が閉門の上、本家の広島藩浅野家に引取られることが決定しました。これはお家再興が事実上なくなったことを示しているのです。大石の主流派と堀部の江戸急進派の対立点であったお家再興の道が閉ざされたので、彼らは1702年（元禄15年）7月28日に、京都円山にある安養寺の塔頭（たちちゅう）「重阿弥」（江戸時代民衆へ席を貸す貸座敷・京都市東山区）で円山会議を開き、大石は10月に江戸の下り、「吉良邸に討入ることを正式に表明」しました。

この円山会議は前もって予定したものではなかったもので、参加者は偶然に京都周辺にいた浪人達だけでした。この会議に参加出来たのは19人で、内17人は後に仇討ちに参加した人達でした。そして会議は当然秘密であったため、議論の詳細は一切わからないのです。今日伝わる円山会議の内容は、初期の実録本「赤城義人伝（せきじょうぎじんてん）」で創出されたものです。



赤城義人伝

**閑話休題** （註）討入り事件は1702年か1703年か？

討入り事件が起ったのは「元禄15年12月14日」です。「元禄15年」は西暦の「1702年」に相当しますが、この「12月14日」は、当時日本全国で使われていた「貞享暦」（現代日本で言う「旧暦」とほぼ同じと考えて差し支えありません）による日付で、グレゴリウス暦（現代日本で言う「新暦」）では翌年の「1月30日」になります。川崎支部便りでは、「貞享暦に従い1702年」として記載しています。

この事件は海外でも関心を持ったらしく、1870年にミッドフォードが「47RONIN」（2013年公開のアメリカ合衆国のファンタジー・アドベンチャー映画。忠臣蔵をモチーフとし、四十七士にキアヌ・リーブス演じる架空の人物であるカイが参加）というタイトルで赤穂事件を英訳しています。その5年後には、F. V. ディキンズが『仮名手本忠臣蔵』を全訳（1971年にドナルド・キーンによる新しい英訳を発表）し、日本文化の特徴を表すものとして外国に知られています。

### 人生を豊かに（雑学のすすめ）

スコットランドで6週間を過ごし帰国したら、首、肩のこりがひどくなり、目は疲れてぼやけ、集中力は無くなり、腰まで痛くなったのは田中ランディ（1959年生まれ作家）です。友人から即回復の秘訣を教わったそうです。「医者自身が困った時に使う方法が一番効くのです。」それは「温める」ことです。ただ、それだけ。

「身体は、火傷と急性の炎症以外は、ほぼ温めると良い。年と共に軟骨が固くなって血流が悪くなる。特に首だ。耳の後ろを通っている筋肉が固くなると脳に血と酸素が行かなくなって脳機能が低下し、目も霞むし、喉や口が乾き、手が痺れる。」

どうすれば良いか。「ゆっくりと耳の後ろの筋肉をほぐして使い捨てカイロを手拭いで首に巻いて温めるだけ。」試してみました。本当に良く効きます。「使い捨てカイロは遠赤外線が出ているので、皮膚の奥まで温まるから。低温火傷には注意してね。」身体が楽になります。是非お試しあれ。



### 第8.8節 討ち入り直前

(2022年01月 第48号)

計画が漏れては達成できない仇討ち。緊迫した事態が続きます。

#### 1) 仇討ちの意思決定と大石の思惑違い

大石が行った山科会議の頃までの同志は120名ほどいましたが、円山会議で討ち入りが決定すると、残念ながら脱盟する人が続出しました。この時、大石内蔵助の親戚で、これまで大石を支えてきた奥野将監、小山源左衛門、進藤源四郎の3人が脱盟しました。大石としては、討ち入りの時まで支えてくれると思っていた親戚であり、家中の主で位の高い3人が脱盟したことで、大石は描いていた仇討ちの計画を変更しなくてはならないと思った様です。

京都に来ていた堀部達は江戸に戻ると、隅田川で二艘の船を借り、月見の宴を装って、船中で江戸の同志たちに「円山会議」の報告をしました。(船中会議)

#### 2) 大石の「神文返し」と藩士達の気遣い

同志達の脱盟を受けて、大石は赤穂浪士の貝賀弥左衛門と大高源吾を派遣して、連判状から切り取った血判を返して回ったのでした。いわゆる「神文返し」です。近い将来、仇討ちした後に、血判状に名前が残っていると、討ち入り後に参加しない人達に災い（わざわい）が及ばぬ様にとの大石の気遣いと、私は思っています。

大石は討ち入り日決定で、脱盟者が出る事は予想していたと思います。しかし一説では、討ち入りはなくなったとの偽りで神文を返し、受け入れた者は戦力から外し、反論して受け取らなかったものは本当に命を捨てる覚悟で、主君を思う「同志」として厳選するための方法と考えたと伝えられています。対に仇討ちを成功させなくてはとの、大石の思いが表れている話です。

#### 3) いよいよ大石内蔵助、討ち入りに江戸に向かう

大石内蔵助は垣見五郎兵衛と名乗り、京都円山会議での約束通りに1702年（元禄15年）10月7日に京都を出発し、10月26日に現在の川崎市「平間村」の赤穂浪士の隠れ家とか、宿泊場所と言われている「称名寺」に入りました。

**閑話休題** 12月14日は、当時日本全国で使われていた「貞享暦」（現代日本で言う「旧暦」とほぼ同じ）の日付で、グレゴリオ暦では翌年の1月30日になる

京都を出立して約20日で川崎市平間村に入りましたが、途中箱根を通り、仇討ちで知られている曾我兄弟の墓を詣で、仇討ちの成功の祈願をしました。この時、墓石を少し削り、懐中に納めたと言われています。

**閑話休題** 赤穂浪士の討ち入り、曾我兄弟の仇討ち、渡辺数馬と荒木又右衛門が数馬の弟の仇であった河合又五郎を討ち取った鍵屋の辻の決闘が「日本三大仇討ち」と言われています

### 4) 川崎市の平間村の「称名寺」

大石は平間村での約 10 日間、討入りの計画を練っていたことと思います。江戸急進派との連絡のため、人との往来もあった事でしょう。江戸に行くには「丸子の渡し」に近いし、「小向いの渡し」「矢口の渡し」「平間の渡し」と多くの選択肢がありました。

江戸の町中では、「高家でありながらずい吉良には咎（とが）めなし、一方の真面目にやっている人が即切腹させられ損する時代である」と多くの人が思っていたと思いますし、幕府も江戸庶民もことによると「討入り」を予測する噂も多く流れていたかもしれません。

約 18 か月と時間が経ていきますから、仇討ちも出来ない浅野の藩士達や、主君が気の毒と思っていた人々が多かったかもしれません。いずれにしても、江戸より川崎平間の方が目立たなかったと思います。

ここから同志達へ第一訓令を発したそうです。討ち入りの注意事を記載した同志宛の「討ち入り十ヶ条の訓令」です。

「称名寺」は川崎市の真宗大谷派寺院で、赤穂浪士ゆかりの寺として知られます。赤穂浪士が江戸に入る前に平間村に逗留したことは史実であるのに余り知られていません。それは赤穂事件から約 15 年後に初演の「仮名手本忠臣蔵」が有名で史実と思われたためです、そのため数ある赤穂浪士討ち入り映画でも、平間村逗留を描いたものはなく、取り上げたのは史実に沿った NHK の大河ドラマ赤穂浪士だけです。（川崎市立下平間小学校の裏に有ります）

遺品としては、大石良雄愛用のおかめの面と書／山鹿素行の書／富森助右衛門愛蔵の銚子と盃／他には浪士の書簡／日上幸川筆の「紙本着色四十七士像」などあります。四十七士像は 1985 年（昭和 60 年）12 月に川崎市文化財の指定を受けて入るものです。これらの遺品は毎年 12 月 14 日に一般公開しております。（川崎ロータリークラブ温故知新 本田 和氏筆）

また、2021 年になり、大石内蔵助以下 10 名ほどの浪士が、平間村に滞在した史実を扱った映画が見つかったそうです。「日本映画誕生 100 周年記念作品」として東宝の威信を賭けて製作され、市川崑監督、高倉健主演で、1994 年 10 月 22 日に公開された「四十七士人の刺客」です。原作は池宮彰一郎（新潮社）。

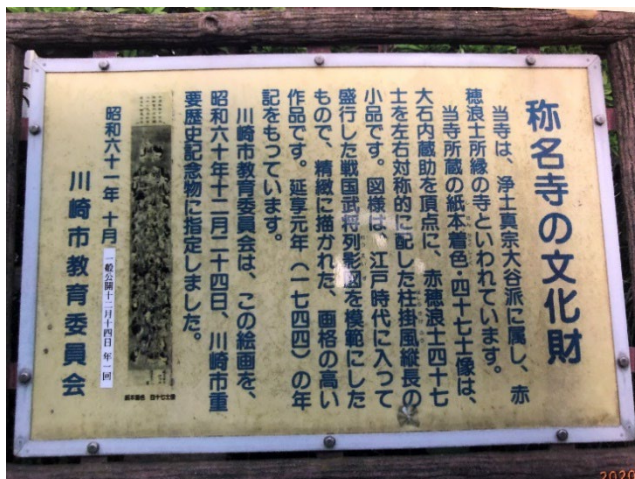
またこの寺には赤穂浪士の遺品を所蔵しています。





称名寺本堂

(川崎市幸区下平間 183—JR 南武線鹿島田駅下車 徒歩 10 分)



### 5) 討入り日近し、大石内蔵助の最後の諸々の対応

1702 年（元禄 15 年）11 月 5 日に大石は川崎平間村を出立し、江戸に入りました。討入り 40 日前になります。江戸は日本橋近く、石町 3 丁目の小山屋の裏店（うらだな）に住み、小山屋の後見のため江戸に出てきた叔父ということにして、垣見五郎兵衛と名乗っていました。

映画の一シーンで、大石が京都から江戸に向かっていた時に、本物の垣見五郎兵衛と対面する場面がありました。これは造り話です。

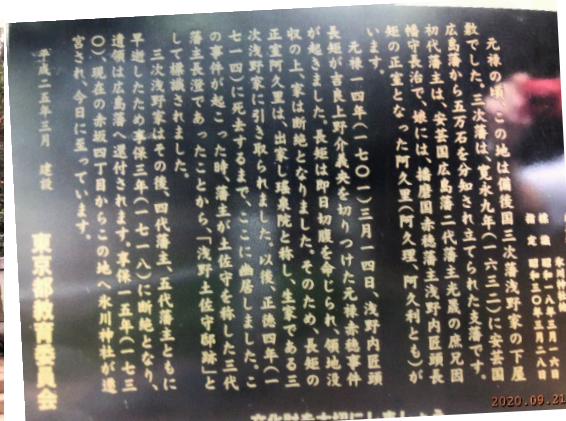
刃傷沙汰から約 18 か月たっています。同志達は困窮していました。秋も過ぎ寒くなるのに着物が買えない者、家賃が払えない者等の同志が出ました。大石はこれらの同志の金銭援助もしました。すでに赤穂藩の残金も少なくなり、討入りに対する猶予もなくなっていました。

### 6) 元禄 15 年 11 月 29 日

大石は最後の詰めである、大石が預かった討入り費用の使途が細かく記録された「預置候金銀請払帳」（あずかりおきそうろう きんぎん うけはらいちょう）を、切腹した浅野内匠頭の未亡人である瑤泉院（ようぜいいん）へ渡すため、瑤泉院の用人である落合与左衛門に送り届けさせています。この時の落合宛の手紙の中で、大石内蔵助は討入りが近いことを知らせているのです。そのうえ、これを届けたのは大石本人ではなく、近松勘六（赤穂浪士 47 士の一人）の下僕甚三郎が届けたと言われています。この時瑤泉院は、赤坂にあった実家に引取られていました。現在の港区赤坂にあります。

**閑話休題** 江戸元禄時代のこの地は、備後国（広島県東部）三次（みよし）藩浅野家の江戸下屋敷があったところ。三次藩は 1632 年（寛永 9 年）に安芸国広島藩から 5 万石を分知された支藩で、浅野内匠頭長矩の正室の阿久里（出家して瑤泉院）の実家です。瑤泉院は 1714 年（正徳 4 年）に死去するまで、幽閉されていました。第 4 代、第 5 代藩主が早死にしたので 1718 年（享保 3 年）に藩は断絶となり、氷川神社は 1730 年（享保 15 年）に赤坂一ツ木台地から現在地へ遷宮されたそうです。

## 第8章 忠臣蔵と川崎市の縁（ゆかり）



\* 南部坂を上った坂上の氷川神社の入口。右側の石垣の内部は、アメリカ大使館の宿舎。石垣に沿って進むと、氷川神社に着きます。

### 7) 討ち入り費用の明細

討ち入り費用の明細の「預置候金銀請払帳」（箱根神社所蔵）には、要した軍資金の使い道を厳正に記録したことが残っています。大石内蔵助が預かり管理してきた金額を、まず藩札への支払い、そして藩士達に支払った退職金の残りの391両と、預かっていた瑤泉院が浅野家に嫁入りした時に持参した化粧料の300両の計**691両**が討ち入りの**軍資金**となり、現在の金額で約**8200万円**になります。

支出（端数は省略）

- |           |              |                           |
|-----------|--------------|---------------------------|
| ①旅費・江戸逗留費 | 248両（2970万円） | （同志：江戸・京都・大阪・赤穂にて）        |
| ②生活費補助費   | 132両（1587万円） |                           |
| ③仏事費      | 127両（1533万円） | （京都瑞光院に内匠頭の墓建立の寄付に100両使用） |
| ④江戸屋敷購入費  | 70両（840万円）   |                           |
| ⑤御家再興工作費  | 65両（783万円）   |                           |
| ⑥討ち入り装備費  | 12両（144万円）   |                           |

## 第8章 忠臣蔵と川崎市の縁（ゆかり）

⑦会議費 11両（132万円）

⑧その他 33両（379万円）

以上の内容で、討入り費用との差は7両（約77万円）不足となり、大石内蔵助が自腹を切って負担したのです。討入りを悟られない為の芝居であったのか、映画でも京都の遊里で遊興したと言われた大石内蔵助ですが、その費用は軍資金からは一銭も出されていない事が分かっている様です。

大石は父良昭が1673年34歳の若さで他界し、そのため祖父の世話になりますが、1677年内蔵助19歳の時に祖父良欽も他界し、その遺領1500石と、内蔵助の通称を受け継ぎました。そして、大叔父・良重の後見を受けました。1679年（延宝7年）21歳の時に正式な筆頭家老になりました。平時における大石内蔵助は凡庸な人であった様で、「昼行燈」（ひるあんどん）と言われていて、藩政は老練で財務に長けた家老の大野知房（赤穂藩の末席家老・「忠臣蔵」では不忠臣の代表格・）に任せました。大石内蔵助は「昼行燈」と言われても、良くも悪くも先を見極めて確実に対応出来る人物と思われま

### 人生を豊かに（雑学のすすめ）

中原街道がいつごろから存在していたかについて、研究者の間で古墳時代（250年～600年）から、飛鳥時代（592年～710年）から、そして平安時代後期（794年～1186年）からの3世紀、5世紀、7世紀であるとする「753論争」と言われています。

現在の神奈川県の中郡から多摩川の「丸子の渡し」の間は、昔は東海道の一部として早くから使われていました。川崎市宮前区にある創建740年の影向寺（ようごじ）の近くには、橘樹郡の郡家（ぐんか）跡もあります。このことから、古くから中原街道はあったのです。

戦国時代小田原城主であった後北条氏（北条早雲は元・伊勢宗端）は父早雲から平定した相模を継承し、小田原入り後に姓を伊勢から北条に改めました。北条氏も北上するのに重要な街道と考えていたのか、直線的に整備をしました。徳川家康も豊臣秀吉の命で、駿府から江戸への移動「関東移封」「関東入国」「江戸入り」等と言われたのが1590年（天正18年）で、中原街道を使って江戸に入りました。平間村で大願成就を願っていた大石内蔵助と一行は、「平間の渡し」を渡り、どのルートで江戸に入ったのでしょうか。

### 耳寄り情報

#### 日本の地域資産（温泉）①

温泉はその泉質だけではなく、その地の人々や訪れた人たちが築き上げた文化や景観があります。各地の温泉近くから縄文遺跡が発見されたのは約2400年前の縄文時代です。道後温泉には聖徳太子が温泉の効用を讃える碑文を作ったそうです。「伊予国風土記」（いよのくにふうどぎ）の逸文では、聖徳太子が596年に道後温泉を訪れて、道後温泉の効用と風光明媚さを讃える碑文を作ったとされています。思うに、飛鳥時代には皇族を受け入れる施設が道後温泉には有ったと思います。

## 第8章 忠臣蔵と川崎市の縁（ゆかり）

清少納言の「枕草子」が完成した1001年には、三名泉が記されています。「枕草子」第117段に「湯はななくりの湯、有馬の湯、玉造の湯」とうたわれ、七栗の湯（現在の榊原温泉：三重県津市又は別所温泉：長野県上田市）、有馬の湯（現在の有馬温泉：兵庫県神戸市）、玉造の湯（現在の玉造温泉：島根県松江市）が日本三名泉とされています。しかし、枕草子の原文は存在しないので、鎌倉時代以降書写されたものが現存するのみで、多くは誤植や加筆が加えられ、枕草子（三巻本）には日本三名泉の記述すらありません。



### 日本の地域資産（温泉）②

905年（延喜5年）に奏上された「古今和歌集」（奏覧後に内容に手を加えた跡があるので912年（延喜12年）の説もある）を見ると、詞書（ことばがき）に「但馬（たじま）国の湯」の文字が有るので、志賀直哉で有名な城崎（きのさき）温泉（兵庫）と見られています。源氏物語にも道後温泉が登場します。

武田信玄等の戦国武将は領地内の温泉地を確保し、リハビリセンターとしていたことはよく知られています。1582年（天正10年）に京都の山崎の戦いで明智光秀を破り、1583年（天正11年）に賤ヶ岳の戦い（しずがたけのたたかい）で勝利してから豊臣秀吉の有馬温泉通いが始まります。丸腰で温泉に入ることは、平和の時があったことです。また、徳川家康は江戸幕府を開いた翌年（1604年）には、熱海温泉（静岡県）に7日間逗留した記録が残されています。徳川家康は熱海の湯を樽に詰めて、各地の大名に贈ったそうです。4代将軍家綱は、新しい檜の樽を用意させ、紋付き袴の係りが、長柄杓（ながびしゃく）で熱海の大湯の源泉を汲み入れました。封をされた湯樽は「御汲湯（おくみゆ）」と呼ばれ、昼夜を分かたず江戸城に運ばれました。江戸時代には各地の温泉を紹介した「旅行用心集」（1810年）には、諸国温泉292か所が紹介され、「温泉番付」も登場しました。

長野県の野沢温泉を好む墨客（ぼっかく）は多く、代表的なのは芸術家の岡本太郎で、毎年の様に訪れたので、野沢温泉村の名誉村民になりました。太郎の母である岡本かの子（本名は岡本カノ）の文学碑は、川崎市高津区の二子神社（高津区二子一丁目－田園都市線の二子新地駅下車徒歩3分）にあります。境内には揺らぐ炎のような白い「夢幻の白鳥」が迎えてくれます。全国の愛慕者によって1962年11月に建てられ、彫刻の台座には「この誇りを亡き一平とともにかの子に捧ぐ 太郎」という制作者で長男の岡本太郎の銘が刻まれ、その横に「ととしにわが悲しみは深くしていよよ華やぐいのちなりけり」という歌が、かの子の筆跡から拾字されて御影石に刻まれています。是非ご覧下さい。

